

江戸時代後期の文学作品における「手拭」の表現

吉田有香*・森理恵**

Representations of 'Tenugui' towels in late Edo period literature

YUKA YOSHIDA* and RIE MORI**

要旨：本研究では、手拭が庶民に広まった江戸時代後期に注目し、文学作品における手拭の表現から、当時の江戸の庶民と手拭の関わり方を明らかにすることを目的とする。文学作品に表現された手拭を表す言葉の出現数を調べた結果、1700年代にはあまり見られず、1800年代から急激に増加していること、洒落本（1749～1802ごろ）→黄表紙（1775～1806ごろ）→滑稽本（1802～1866ごろ）の順に出現率が増加することがわかった。また、文学作品中での手拭の使用方法やそれに対する評言などを考察した結果、江戸時代後期の江戸の町の庶民にとっては、手拭が⁶、日用品の一つであり、実用性と同時に装飾性をも持ち合わせており、見栄を示すアイテムでもあったことが明らかになった。

(2009年10月1日受理)

1. はじめに

1.1 研究の目的と背景

手拭は古くから日本で使われてきた実用品であり、江戸時代には人々の粋を表すアイテムにもなった（下家2005, 36）。

手拭の歴史は『日本霊異記』に手拭の意味を持った「巾」の字が初めて見られたところから始まり、平安時代には神事などの儀式への使用、汗を拭う、物を納めるなどの用途で使用された。鎌倉・室町時代に禅宗の寺には浴室が作られていたことから浴室での手拭の使用があったと考えられている。また、この時代から被り物としての使用が出現した。鎌倉時代以降、武士が戦陣に出るとき、烏帽子の脱落を防ぐために鉢巻をするようになり、江戸時代を通じ手拭が武士の武装の一つとして考えられるようになった。桃山時代には銭湯の商売をするものが現れ、一般のものが銭湯を利用することで手拭の用途が広まり、江戸時代に庶民の生活に密着した実用品となったとされる（松本1973, 28-32）。

手拭は本来の物を拭う用途のほかに、被り物としても独自の文化を発達させた。これについては江戸幕府から度々禁令が出るほどの人気だった（大田区立郷土資料館

編1994）。手拭の被り方には多種多様な種類があり、『守貞謄稿』の手拭被りの項にもその図が載っている（高橋雅夫編2002）。他には長めの手拭を帯に用いることもあった（松本1973, 34）。また、帯刀者が平服で主人の用事に出るときは、身元の確認のために各家の染めを統一した長い手拭を前に挟んだり、大名の輿丁が「挟み手拭」という揃いの麻手拭を扇のように腰に挟んで装飾的に使ったりした例もあり、その見た目も利用されていた（同前, 33）。このように手拭は江戸庶民の実用品であり、ファッションの一部であった。

更に、江戸時代の中期頃から粋な人々の間で「何々合」という遊びが流行する。これはそれぞれ趣向を凝らしたものを持ち寄る遊びで、霊宝、扇、浴衣などで行われた。その中に「手拭合」もあり、参加者は趣向を凝らした手拭を染めて持ち寄った（細目1980, 11）。その時に持ち寄られた手拭図案集などが今も残っており、当時の粋人のセンスを伝えている（谷・花咲解説1986）。

このように、手拭は江戸時代の人々にとって実用品であり、ファッションの一部でもあった。手拭の研究は主に地方の慣習・伝統的な使用方法や色などの研究と、江戸の町に住む町人のファッションの一部としての二方面から研究がなされている。しかし、江戸町人の手拭の使

* 株式会社ダイレクトショップ TSUTAYA 事業部
TSUTAYA Department, DIRECT SHOP Company Limited

** 京都府立大学大学院生命環境科学研究科服飾文化史研究室
Laboratory of Cultural History of Clothing, Graduate School of Life Environment, Kyoto Prefectural University

用用途に関する詳細な研究はされていない。本研究では、手拭が庶民に広まった江戸時代後期に注目し、当時流行した文学作品から当時の江戸町人たちと手拭の関わり方について調べ、それに見る江戸町人の実態について明らかにすることを目的とする。

1.2 先行研究

先行研究では、柳田國男「手拭沿革」(1943)、同「手巾序説」(1949)において民俗学的見地から地方の手拭の用途、名称、地域特有の被り方について研究されている。また、榎並英子「庶民の衣生活に関する一考察——手拭・前掛・襷について——」(1981)では地方それぞれの手拭による「ハレ」と「ケ」の表現やその地方特有の意匠、慣わしが研究されている。被り物としての手拭の研究は、細目しげ子「かぶりものとしての手拭の起源と変遷(Ⅱ)——江戸時代における手拭かぶりの着装形態の考察——」(1980)で被り方の例とその様子が描かれた絵画資料が提示され、染色方法についても述べられている。「手拭合」については谷峯蔵・花咲一男解説『洒落のデザイン 三東京傳画「手拭合」』があり、山東京傳の出版した「手拭合」の図版と合わせてその意匠についての解説が行われている。

これらのように主に研究されている範囲は近代の地方における手拭の実態や、江戸時代の庶民の手拭の利用方法、被り方についてであり、江戸時代の江戸に住む庶民の日常生活全般に手拭がどのように関わっていたのかに関する詳細な研究は見当たらなかった。一部研究の中で文学作品中の表現について触れる部分もあるが、一部分の特徴的な部分を取り上げているのみであり、どの程度、手拭が文学作品に登場し、それがどのように使用され、どのような意味を持つのかについての考察はされていない。

1.3 研究方法

はじめに江戸時代の主な大衆文学をリストアップした。主な文学作品は手拭が庶民に普及していた江戸時代後期を中心に集め、庶民への影響力が大きかったと思われる作家の作品を中心に、なおかつ江戸の町に住む庶民を取り扱ったものを集めた。

リストの作品を調査し、手拭が扱われている部分を抽出、手拭を表す言葉・用途・使用場所をまとめた。また、作品中で特徴的に扱われているものについても補足事項としてまとめた。なお、一作品であっても年をまたいで複数巻出版されているものに関しては、巻ごとの発行年で一覧にまとめた。同年に上下巻発行されているものに関しては分類しなかった。上記文学作品の挿絵も同時に調査し、作品本文同様、用途についてまとめた。それぞれの調査結果を項目ごとにまとめ、表・グラフを作成した。

文学作品一覧は表1に示した。なお、結果一覧では表

2に示す通り番号を使用し、その他、結果の作品表記順序についてもこれに準ずる。

なお、文学作品の本文・挿絵については、中野ほか校注2000、中村校注2000、式亭1930を参照・引用した。

2. 結 果

2.1 文学作品の本文中の手拭

2.1.1 本文に登場した手拭に関する記述

表3に本文中に登場する手拭に関する記述の一覧を示した。「記述」の項目の「」は地の文、『』は会話文からの抜き書きを表す。以下、手拭に関する記述があった9作品について項目別に集計した結果を表にまとめた。

2.1.2 登場回数(表4)

長編である「東海道中膝栗毛」と「浮世風呂」に比較的多くの記述が見られた。共に風呂での使用に関する記述と共に登場したものが多かった。

2.1.3 表記(表5)

大体が「手拭」という漢字表記であった。一部、同じ作品中でも「手拭」と「手巾」の二種類が使い分けられているものがあった。

2.1.4 用途(表6)

そのほとんどが被り物(鉢巻を含む)か、衛生関係(入浴、汗を拭うなど)に分類された。

2.1.5 手拭を身につけている・使用している部位(表7)

前項の使用用途で被り物が多かったことに対応して、頭に使用しているものが多かった。その他は身体以外への利用(物を包む、など)か、その他の身体部分への利用であった。

2.1.6 素材(表8)

素材についての記述はほとんどなかった。「木綿」と表記されていたものもあった。

2.2 文学作品の挿絵に見られる手拭

本文中の記述以上に多い32作品中25作品の挿絵に手拭が描かれていた。25作品中の149図に、合計294例の手拭の描写を確認することができた。本文中に記述がなかった作品でも、挿絵においては登場人物やその他の人々が手拭を身につけて描かれていることがあった。294例の手拭について、用途を分類した結果を表9に示した。

294例中、196例と、被り物としての使用が描かれたものが極めて多く、町中のシーンでは町行く人々に手拭や頭巾を被った人物が複数見られた(図版1)。描かれ

表1 文学作品一覧

発行年	分類	作品名	作者	画
寛延2年(1749)	洒落本	跣婦人伝	泥郎子(山岡浚明)	
明和7年(1770)	洒落本	遊子方言	田舎老人多田翁 (丹波屋利兵衛)	
安永4年(1775)	洒落本	甲駅新話	山手馬鹿人 (大田南畝)	勝川春章
	黄表紙	金々先生栄花夢	恋川春町	恋川春町
安永6年(1777)	黄表紙	桃太郎後日晰	朋誠堂喜三二	恋川春町
天明3年(1783)	黄表紙	右通髓而 啞多雁取帳	奈蒔野馬乎人 (志水燕十)	忍岡哥磨
天明4年(1784)	黄表紙	従夫以来記	万象亭竹杖為軽	喜多川歌磨
天明5年(1785)	黄表紙	江戸生艶気樺焼	山東京伝	北尾政演
天明6年(1786)	黄表紙	江戸春一夜千両	山東京伝	北尾政演
天明7年(1787)	洒落本	古契三娼	山東京伝	山東京伝
寛政2年(1790)	洒落本	傾城買四十八手	山東京伝	山東京伝
	黄表紙	大極上請合壳 心学早染草	山東京伝	北尾政演
寛政3年(1791)	洒落本	繁千話	山東京伝	山東京伝
寛政4年(1792)	黄表紙	形容化景唇動 鼻下長物語	芝全交?	北尾重政?
寛政10年(1798)	洒落本	傾城買二筋道	梅暮里谷蛾	雪華
享和2年(1802)	滑稽本	東海道中膝栗毛 初編	十返舎一九	十返舎一九
享和3年(1803)	滑稽本	東海道中膝栗毛 二編	十返舎一九	十返舎一九
享和4年(1804) 文化元年	滑稽本	東海道中膝栗毛 三編	十返舎一九	十返舎一九
	滑稽本	諸用 附会案文	十返舎一九	喜多川喜久磨
文化2年(1805)	滑稽本	東海道中膝栗毛 四編	十返舎一九	十返舎一九
	黄表紙	滑稽しつこなし	十返舎一九	喜多川月磨
	滑稽本	東海道中膝栗毛 五編	十返舎一九	十返舎一九
文化3年(1806)	黄表紙	串戯しつこなし 後編	十返舎一九	喜多川月磨
	滑稽本	酩酊気質 上・下	式亭三馬	
文化4年(1807)	滑稽本	東海道中膝栗毛 六編	十返舎一九	歌川豊国・十返舎十九
文化5年(1808)	滑稽本	東海道中膝栗毛 七編	十返舎一九	松高斎(勝川)春亭 十返舎十九
文化6年(1809)	滑稽本	東海道中膝栗毛 八編	十返舎一九	美丸・式磨・十返舎十九
	滑稽本	浮世風呂 前編	式亭三馬	北川美丸・歌川国直
文化7年(1810)	滑稽本	於都里綺	十返舎一九	喜多川月磨
	滑稽本	浮世風呂 二編	式亭三馬	北川美丸・歌川国直
	合巻	ひだり甚五郎 腕雕一心命	式亭三馬	歌川国満
	滑稽本	七癖上戸	式亭三馬	歌川国貞
	滑稽本	早替胸のからくり	式亭三馬	歌川豊国
文化9年(1812)	滑稽本	浮世風呂 三編	式亭三馬	北川美丸・歌川国直
	滑稽本	忠臣蔵偏癡氣論	式亭三馬	歌川国直
	滑稽本	酩酊酒 一盃綺言	式亭三馬	歌川豊国
文化10年(1813)	合巻	敵討余世波善津多	十返舎十九	松高斎(勝川)春亭
	滑稽本	浮世風呂 四編	式亭三馬	北川美丸・歌川国直
	滑稽本	浮世床 初編	式亭三馬	歌川国直
文化11年(1814)	滑稽本	古今百馬鹿	式亭三馬	歌川国直
	滑稽本	人心覗からくり	式亭三馬	歌川国直
	滑稽本	浮世床 二編	式亭三馬	歌川国直
文政12年(1829)	合巻	串戯しつこなし	式亭三馬	歌川国芳・歌川国丸

表2 作品番号一覧

番号	作品名	作者
1	跣婦人伝	泥郎子(山岡浚明)
2	遊子方言	田舎老人多田爺(丹波屋利兵衛)
3	甲駅新話	山手馬鹿人(大田南畝)
4	金々先生栄花夢	恋川春町
5	桃太郎後日晰	朋誠堂喜三二
6	右通槌而 陸多雁取帳	奈蒔野馬乎人(志水燕十)
7	従夫以来記	万象亭竹杖為輕
8	江戸生艶気樺焼	山東京伝
9	江戸春一夜千両	山東京伝
10	古契三娼	山東京伝
11	傾城買四十八手	山東京伝
12	大極上請合売 心学早染草	山東京伝
13	繁千話	山東京伝
14	形容化景昏動 鼻下長物語	芝全交?
15	傾城買二筋道	梅暮里谷蛾
16-1	東海道中膝栗毛 初編	十返舎一九
16-2	東海道中膝栗毛 二編	十返舎一九
16-3	東海道中膝栗毛 三編	十返舎一九
16-4	東海道中膝栗毛 四編	十返舎一九
16-5	東海道中膝栗毛 五編	十返舎一九
16-6	東海道中膝栗毛 六編	十返舎一九
16-7	東海道中膝栗毛 七編	十返舎一九
16-8	東海道中膝栗毛 八編	十返舎一九
17	諸用 附会案文	十返舎一九
18	滑稽しつこなし	十返舎一九
19	串戯しつこなし 後編	十返舎一九
20	酩酊氣質 上・下	式亭三馬
21-1	浮世風呂 前編	式亭三馬
21-2	浮世風呂 二編	式亭三馬
21-3	浮世風呂 三編	式亭三馬
21-4	浮世風呂 四編	式亭三馬
22	於都里綺	十返舎一九
23	ひだり甚五郎 腕雕一心命	式亭三馬
24	七癖上戸	式亭三馬
25	早替胸のからくり	式亭三馬
26	忠臣蔵偏癡氣論	式亭三馬
27	酩酒 一盃綺言	式亭三馬
28	敵討余世波善津多	十返舎十九
29-1	浮世床 初編	式亭三馬
29-2	浮世床 二編	式亭三馬
30	古今百馬鹿	式亭三馬
31	人心覗からくり	式亭三馬
32	串戯しつこなし	式亭三馬

表3 本文資料結果一覧

	通し番号	表 記	読み方	用 途	記 述	部 位	場 所	素材等	補 足 事 項
2	遊子方言	2							
		2-1	手のごひ	衛生	『手のごひを、ちょっと、あつい湯でしぼってください』		船宿		
		2-1	手のごひ	衛生	『手のごひ、おれがやら』		船宿		
		2-3	手のごひ	衛生	「と、あさぎの手のごひを出し、ゆでぬれたるを取、しばりて顔を拭く。」	顔	船宿	あさぎ	「あさぎの手のごひ」
3	甲駅新話	3							
		3-1	あせ手ぬぐひ	被り物	「と、あせ手ぬぐひを出して笠ひもへはさみ、鼻から口をお、ひかくし、人目をしのぶという身をする」	顔	遊郭		このあたり、たいして顔が広くもないのに顔の広いふりをする谷粒の半可通ぶり。／本文解説より
		3-2	手ぬぐひ	衛生	『手ぬぐひをあげふか』	足	茶屋		茶屋に上がる際に足を洗うときのやりとり
		3-3	汗手ぬぐひ	衛生	『俺がのは汗手ぬぐひで、役にた、ねへ』				同上
7	従夫以来記	7							
		7-1	鉢巻	はちまき	被り物	駕籠昇	遊郭		
		7-2	ほうぶり		被り物	駕籠昇	遊郭		「ほうかぶり」の倒語。遊里に遊びに行く客が頬被りをして顔を隠しているのを駕籠昇がしている。しかも逆にしている。／本文解説より
8	江戸生艶気樺焼	8							
		8-1-1	手拭	てぬぐい	衛生		手水		手水手拭…寺社の御手洗の上に掛ける手拭／本文解説より
16	東海道中膝栗毛	16							
	初編	16-1-1	かぶりもの	その他	被り物		往来		大名行列に行き当たり、かぶりもの(笠や手拭)を取るように先私が言っている
		16-1-2	手ぬぐひ	てぬぐひ	衛生		風呂		
		16-1-3	手ぬぐひ	てぬぐひ	その他				越中ふんどしが古くなったら手拭に使うのが徳という意
		16-1-4	手ぬぐひ	てぬぐひ	衛生		風呂		
	二編	16-2-1	手拭	てぬぐい	被り物		往来	白	「白い手拭」
		16-2-2	手ぬぐひ	てぬぐひ	被り物		往来	晒	実は手拭ではなく、木綿の平打の紐のついた越中ふんどし
		16-2-3	手拭	てぬぐい	被り物		往来		上記の手拭(ふんどし)をさす
		16-2-4	手拭	不明	被り物		往来		同上
		16-2-5	手ぬぐひ	てぬぐひ	被り物		往来		同上
		16-2-6	手ぬぐひ	てぬぐひ	衛生		往来	木綿	この言葉から木綿の手拭を普段使っていると分かる

	16-2-7	手ぬぐひ	てぬぐひ	被り物	狂歌「手ぬぐひとおもふてかぶるふんどしはさてこそ恥をさらしなりけり」	頭	往来		「頭にかぶる」と「毛氈をかぶる」(失敗する)の略を、「恥をさらす」と「さらし木綿」をかけている
	16-2-8	手ぬぐひ	てぬぐひ	その他	「手ぬぐひをひろげ、わんにもりたるめしを、一ぜんちやつと打ちあげ、」		宿の本陣		本陣は公家大名や幕府の官人の為の宿
	16-2-9	てぬぐひ	てぬぐひ	その他	「てぬぐひにおつ、み、」		宿の本陣		上記の手拭とおなじ
	16-2-10	手ぬぐひ	てぬぐひ	その他	「ト手ぬぐひにつ、みしめしをいだす」		軒の下		先ほどの飯を包んだ手拭
二編	16-2-11	手ぬぐひ	てぬぐひ	その他	「かの手ぬぐひをうちふるつて」		軒の下		先ほどの飯を包んだ手拭
	16-2-12	手ぬぐひ	てぬぐひ	その他	「ヤアこれは、手ぬぐひにつ、んできたな。」		軒の下		先ほどの飯を包んだ手拭
	16-2-13	手ぬぐひ	てぬぐひ	衛生	「手めへが金玉やなにかをあらつた、手ぬぐいひだものを」	体	風呂		先ほどの飯を包んだ手拭は普段入浴に使っていたことが分かる
	16-2-14	手拭	てぬぐひ	被り物	「手拭のさきを結ずてかぶり」	頭	遊郭		122・123の挿絵参照
	16-2-15	てぬぐひ	てぬぐひ	被り物	「さらしのでぬぐひを、ぬぐひにかぶり」	頭	遊郭	晒	頭の後ろに手拭の先を回し、首にかけて被っている
四編	16-4-1	手ぬぐひ	てぬぐひ	その他	「ト三尺手ぬぐひをとき、きた八が手をうしろへまはしてしぼる。」	手	道中		本文中に「とき」とあるので、頭に被っていたものか
	16-4-2	手ぬぐひたけ	その他	その他	「此三分ぎれを、手ぬぐひたけ、きつてくんせへ」		絞染めの布屋		有松絞りの布が高価なので手拭丈(二尺五寸)だけ買う滑稽な様子が描かれている。ここから手拭は二尺五寸が標準だと分かる
五編	16-5-1	手ぬぐひ	てぬぐひ	衛生	「ト手ぬぐひをさげて湯に行。」	体	風呂		
六編	16-6-1	手ぬぐひ	てぬぐひ	被り物	「トいひつ、手ぬぐひを、ていねいにおりて、はちまきをする」	頭	道中		京の人なので喧嘩の最中にも関わらず武士の仇討のように行儀いいのが滑稽/本文解説参考
	16-6-2	手ぬぐひ	てぬぐひ	被り物	「ト手ぬぐひをとつてうちかぶり、」	頭	遊郭の床		北八は遊女に騙されて着物を貸し、遊女が手拭を被って変装した後逃げてしまった
七編	16-7-1	手ぬぐひ	てぬぐひ	被り物?	「ト手ぬぐひをた、みあたまへのせ、そのうへ、はしごをのせ、」	頭	道中		はしごを買わされて重いので頭へ載せる為に手拭を載せた
	16-7-2	手ぬぐひ	てぬぐひ	被り物	「手ぬぐひをた、んで、だいじんふうに、ちよいとあたまにのせて、」	頭	宿		大尽風。置手拭または置頭巾など称し、郭で豪遊の客即ち大尽の風として、芝居などでも試みた。/本文解説より
22 酩酊気質	20								
	20-1	手拭	てぬぐひ	被り物	「れきれきの女中がたいらぎのやうな髪かざりへ手拭をかぶるはさ。」	頭			酔っ払いが管を巻いている様子。「異見上戸」が話している
	20-2	手拭	てぬぐひ	被り物	「しるもしらぬも黒縹子の帯としゃれて、其あたまが手拭だ。」	頭			
	20-3	手拭		被り物	「わざわざ新しい手拭を買て、けふの晴としてかぶるは敷かはいし事だス。」	頭			
	20-4	手拭	てぬぐひ	被り物	「嫁の内へ行く処が天窓はやつぱり手拭」	頭			
	20-5	手拭	てぬぐひ	被り物	「まづ手拭をかぶるといふは掃除でもするか又は田楽でも焼くという時にかぶつた物だ。」	頭			
23 浮世風呂	21								
初編	21-1-1	貸手拭	不明	衛生	「貸手拭の雫はしはれど」		銭湯		
	21-1-2	手拭	不明	衛生	「油で煮染めたやうなる手拭を、いくちなくだらりと肩に懸け」	肩	銭湯の前		

	21-1-3	手拭	てぬぐひ	衛生	「晒の手拭、ところどころ口紅の 附きたるを肩に懸け、」	肩	銭湯の前	晒	
	21-1-4	手拭	てぬぐひ	衛生	「肩の手拭を落とす。」	肩	銭湯の前		
	21-1-5	手拭	てのごひ	衛生	「べらばい、手拭が落ちたイ。」		銭湯の前		
	21-1-6	手拭	てぬぐひ	衛生	「下駄の齒でぐるりと廻りながら、手拭を 拾ひ上げ、」		銭湯の前		
	21-1-7	手拭	てぬぐひ	衛生	「いくちなく前へあて」	体	銭湯		体を隠すのに使用されている
	21-1-8	手拭	てぬぐひ	身につける	「下帯のかはりに腰へまいてゐる」	腰	銭湯		
	21-1-9	手拭	てぬぐひ	被り物	「手拭は丸くして頭へちよいと載せ」	頭	銭湯		
	21-1-10	手拭	てぬぐひ	衛生	「手拭をそゝぐ桶を足で片寄せながら」		銭湯		
	21-1-11	手拭	てにぎい	衛生	「湯も汲み置いて、手拭まで添え置くと は、」		銭湯		西国者が桶につけてあったもっかう禪を手 拭と勘違いして言っている
	21-1-12	手拭	てぬぐひ	衛生	「己れが手拭は絞りて、禪を乾す懸竿へ擴 げおき」		銭湯		
	21-1-13	手拭	てにぎい	衛生	「此手拭は新だつとも、」	体	銭湯		先ほどの手拭と勘違いした禪を、新しいの に何故こんなに汚いのだろうかと言ってい る
	21-1-14	手拭	てぬぐひ	衛生	「かの西國者が手拭にして、顔を洗ひゐる を見て、」	顔	銭湯		
	21-1-15	手拭	てぬぐひ	衛生	「夫やおまへの手拭ちやあるまいがの。」		銭湯		
	21-1-16	手拭	てぬぎい	衛生	「自己所持の手拭、爰さ掛け置きたい。」		銭湯		
	21-1-17	手拭	てぬぐひ	衛生	「夫や手拭ちやない。」		銭湯		
	21-1-18	手拭	てぬぐひ	衛生	「ソシテ手拭も新しいのを貸してくりやれ。」		銭湯		
	21-1-19	手拭	てぬぐひ	衛生	「湯へ行き候と手拭を持つて出たがる」		銭湯		
	21-1-20	手拭	てぬぐひ	衛生	「でつぶりとした男、手拭を絞りながら、」		銭湯		
二編	21-2-1	手拭	てぬぐひ	衛生	「鼻腐の中年増、手拭を絞つてゐる。」		銭湯		
三編	21-3-1	手拭	てぬぐひ	衛生	「銭金は涌出る湯屋の手拭で年の頭をふく は來にけり」と歌に詠まれている	頭	銭湯		
	21-3-2	手拭	てんてん	衛生	「ヨ、ヨ、手拭でお顔や手々をよらくお洗 ひ」		銭湯		幼児言葉か
	21-4-1	手拭	てぬぐひ	被り物	「手拭をすっぽり巻いて、鉢巻のやうに額 で結び」	頭	往来		
	21-4-2	手巾	てぬぐひ	被り物	「晒の手巾は、女中衆がかぶつて野遊に出 る」	頭	野山	晒	
	21-4-3	手拭	てぬぐひ	衛生	「手拭で鉢をふきながら、」	体	銭湯		
	21-4-4	手巾	てぬぐひ	衛生	「手巾と雑巾と取違へて、顔拭く事がなん ほも有るぢや。」	顔	井戸ばた		
	21-4-5	手拭	てぬぐひ	被り物	「つひ手拭のはほうかゝむフフリ、」	頭			
四編	21-4-6	手拭	てんてん	衛生	「ソレ手拭を貸してやりませう。よくお顔 を湿しなさい。」	顔	銭湯		幼児言葉か
	21-4-7	手拭	てぬぐひ	衛生	「兎角手拭のお湯を吸つてならぬ。」		銭湯		
	21-4-8	手巾	てのごひ	衛生	「手巾を指に巻いて、口中を洗つて遺る塩 梅なんぞはうめへもんだ。」	口	銭湯		

24	於都里綺	22											
		22-1	はちまき		被り物	「竹馬 はちまきをして耳とみせる。」	頭						様々な影絵を面白おかしい姿で作っている本
		22-2	手ぬぐひ		その他	「かくのとふり手ぬぐひをおつにひねくつて、くちにくはへるなどはあじだらう。」	口						
26	七癖上戸	24											
		24-1	手巾	てぬぐひ	その他	「手巾を尋ねては巾着を落とし、…」							
		24-2	抹額	はちまき	衛生	「…其腰はふらふらとして返て頭痛に抹額す。」	頭						被り物ではなく、頭痛治療の一種としての例
27	早替胸のからくり	25											
		25-1	てぬぐひ		身につける	「…モシエ、何もおわすれものはございませんか。あふぎ、てぬぐひ、モシおづきんはエ」		家					普段身につけている持ち物の一つとみられる
31	浮世床	29											
	初編	29-1-1	手拭	てぬぐひ	被り物	「頭へ巻くに」	頭						
		29-1-2	手拭	てぬぐひ	その他	「夕べナ、手拭を一筋余所の女が所からへいつけて來やアがつてナ。」							
		29-1-3	手拭	てぬぐひ	身につける	「長六といふ人、手拭を肩にかけて、」	肩	髪結い屋					
	二編	29-2-1	手拭	てぬぐひ	身につける	「鼻紙、手拭、頭巾、足袋、履物まで揃へて、」		自宅					
		29-2-2	晒三尺	さらし さんじゃく	被り物	歌「船の船頭に晒三尺貰て、わしが冠ぶるにや晒でもよらいが……」	頭		晒				歌の続きに「何と染めよか染屋に聴けば」とある

表4 登場回数

作品名	巻	小計	作品内合計
遊子方言		3	3
甲斐新話		3	3
東海道中膝栗毛	初編	4	
	二編	15	
	三編	0	
	四編	2	
	五編	1	
	六編	2	
	七編	2	
	八編	0	26
酩酊気質	上	0	
	下	5	5
浮世風呂	前編	20	
	二編	1	
	三編	2	
	四編	8	31
於都里綺		2	2
七癖上戸		2	2
早替胸のからくり		1	1
浮世床	初編	3	0
	二編	2	5
合計			78

表5 表 記

作品名	手拭	手ぬぐひ	手巾	手のごひ	てぬぐひ	その他	合計
遊子方言	0	0	0	3	0	0	3
甲斐新話	0	1	0	0	0	2	3
東海道中膝栗毛	4	18	0	0	1	3	26
酩酊気質	5	0	0	0	0	0	5
浮世風呂	27	0	3	0	0	1	31
於都里綺	0	1	0	0	0	1	2
七癖上戸	0	0	1	0	0	1	2
早替胸のからくり	0	0	0	0	1	0	1
浮世床	4	0	0	0	0	1	5
合計	40	20	4	3	2	9	78

表6 用 途

作 品 名	被り物	衛生関係	身につけている	その他	合 計
遊子方言	0	3	0	0	3
甲駅新話	1	2	0	0	3
東海道中膝栗毛	13	5	0	8	26
酩酊気質	5	0	0	0	5
浮世風呂	4	19	3	5	31
於都里綺	1	0	0	1	2
七癖上戸	0	1	0	1	2
早替胸のからくり	0	0	1	0	1
浮世床	2	0	2	1	5
合計	26	30	6	16	78

表7 身につけている・使用している部位

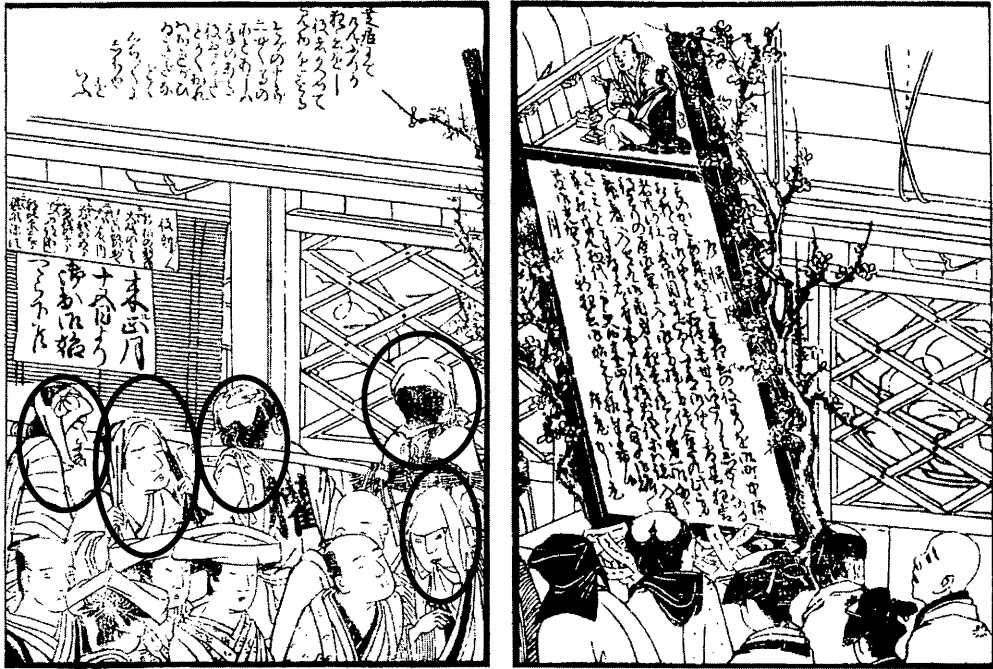
作 品 名	頭	体	肩	顔	その他	合 計
遊子方言	0	0	0	3	0	3
甲駅新話	1	2	0	0	0	3
東海道中膝栗毛	13	4	0	0	9	26
酩酊気質	5	0	0	0	0	5
浮世風呂	3	3	4	4	17	31
於都里綺	1	0	0	0	1	2
七癖上戸	1	0	0	0	1	2
早替胸のからくり	0	0	0	0	1	1
浮世床	2	0	1	0	2	5
合計	26	9	5	7	31	78

表8 素 材

作 品 名	晒	不 明	合 計
遊子方言	0	3	3
甲駅新話	0	3	3
東海道中膝栗毛	2	24	26
酩酊気質	0	5	5
浮世風呂	2	29	31
於都里綺	0	2	2
七癖上戸	0	2	2
早替胸のからくり	0	1	1
浮世床	1	4	5
合計	5	73	78

表9 挿絵中の用途

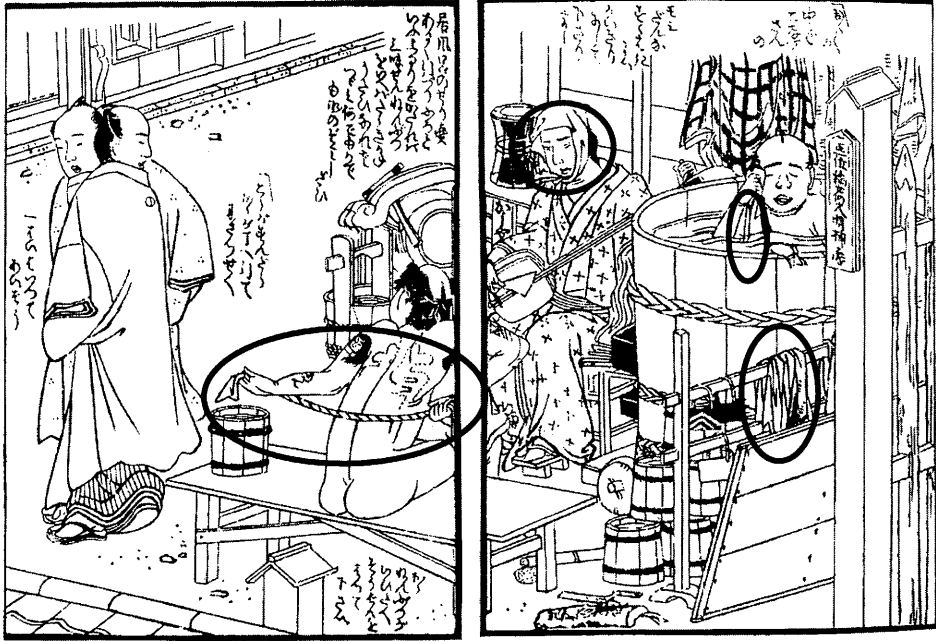
作品名	被り物	衛生関係	身につけている (頭以外)	その他	小計	合計
跣婦人伝	2	0	1	0	3	3
金々先生栄花夢	4	0	0	0	4	4
桃太郎後日噺	3	0	0	0	3	3
啞多雁取帳	6	0	0	0	6	6
従夫以来記	12	3	2	1	18	18
江戸生艶気樺焼	10	0	0	1	11	11
江戸春一夜千両	0	0	0	1	1	1
心学早染草	2	1	0	0	3	3
東海道中膝栗毛 初編	5	0	6	0	11	47
東海道中膝栗毛 二編	3	0	0	0	3	
東海道中膝栗毛 三編	1	0	0	0	1	
東海道中膝栗毛 四編	0	0	0	0	0	
東海道中膝栗毛 五編	0	0	0	0	0	
東海道中膝栗毛 六編	2	0	0	0	2	
東海道中膝栗毛 七編	6	0	0	0	6	
東海道中膝栗毛 八編	21	1	2	0	24	
附会案文	4	1	0	0	5	5
滑稽しつこなし	3	1	3	1	8	8
串戯しつこなし 後編	6	0	1	1	8	8
酩酊気質	1	0	0	1	2	2
浮世風呂 前編	10	13	3	3	29	44
浮世風呂 二編	0	0	0	0	0	
浮世風呂 三編	0	1	4	1	6	
浮世風呂 四編	2	5	3	0	10	
於都里綺	3	0	3	0	6	6
腕雕一心命	30	0	2	1	33	33
七癖上戸	15	0	4	0	19	19
早替胸のからくり	1	0	2	1	4	4
忠臣蔵偏癡気論	3	0	0	1	4	4
一盃綺言	3	0	2	0	5	5
浮世床 初編	5	0	6	0	11	18
浮世床 二編	2	1	4	0	7	
敵討余世波善津多	18	0	0	0	18	18
古今百馬鹿	5	0	5	0	10	10
人心覗からくり	1	0	2	1	4	4
串戯しつこなし	7	0	2	1	10	10
合計	196	27	57	15		294



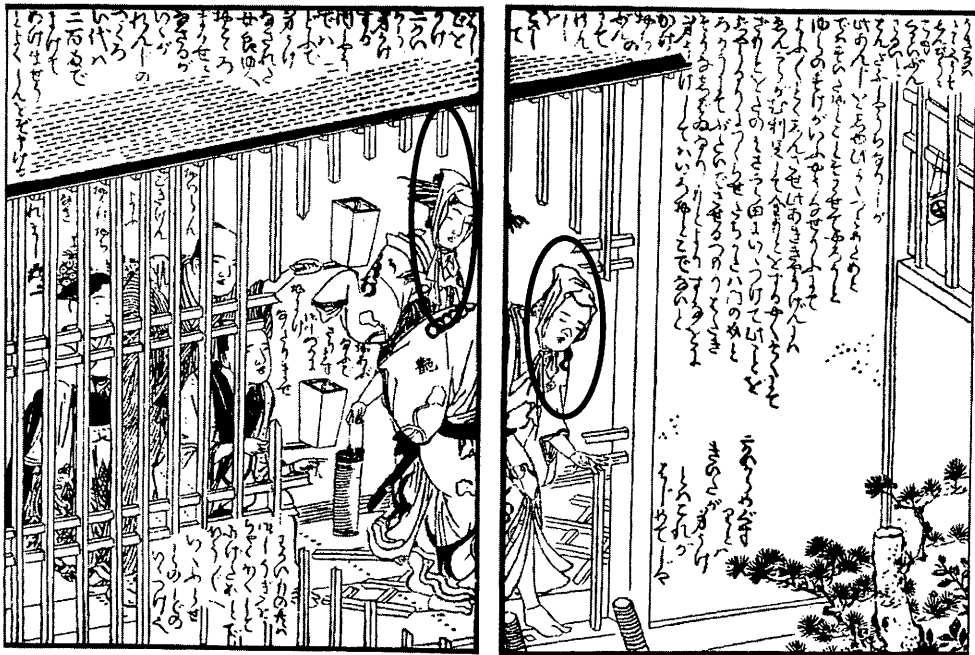
図版1 「従夫以来記」部分（手拭が描かれた部分を○で囲んで示した。以下同）



図版2 「従夫以来記」部分



図版3 「従夫以来記」部分



図版4 「江戸生艶樺焼」部分

る場所は町中、旅の道中、宿の中、遊郭、芝居小屋、風呂などがほとんどであった(図版1~4)。

3. 考 察

3.1 年代と出現数の関係

まず、年代順の作品ごとの手拭を表す言葉の出現数を比べると、1700年代にはあまり見られず、1800年代から急激に増加している(図1)。

本の種類としては調査した作品の滑稽本のすべてに手拭に関する記述が挿絵が見られたが、洒落本にはごくわずかな割合でしか登場しなかった(図2)。洒落本では調査した7作品中3作品にしか記述も挿絵も見られなかった。滑稽本に多く手拭が見られるのには、洒落本よ

り挿絵自体が多いことや挿絵に人物が多く登場するのも一因と考えられる。同様に、挿絵が多くの意味をもつ黄表紙についても挿絵を中心に数多く登場した。年代的には洒落本(1749~1802ごろ)→黄表紙(1775~1806ごろ)→滑稽本(1802~1866ごろ)の順に発行の中心が移り変わっており、図1の結果は手拭の登場が多くなる滑稽本への移り変わりの表れであると思われる。

3.2 用途

用途別の分類では『浮世風呂』を除くほとんどの作品で被り物としての利用が大半を占めていた。銭湯の普及によって手拭が庶民に広まったため、銭湯での使用が目立つのはごく自然なことであると考えられる。挿絵のみを用途別に分類してみると、圧倒的に被り物としての利

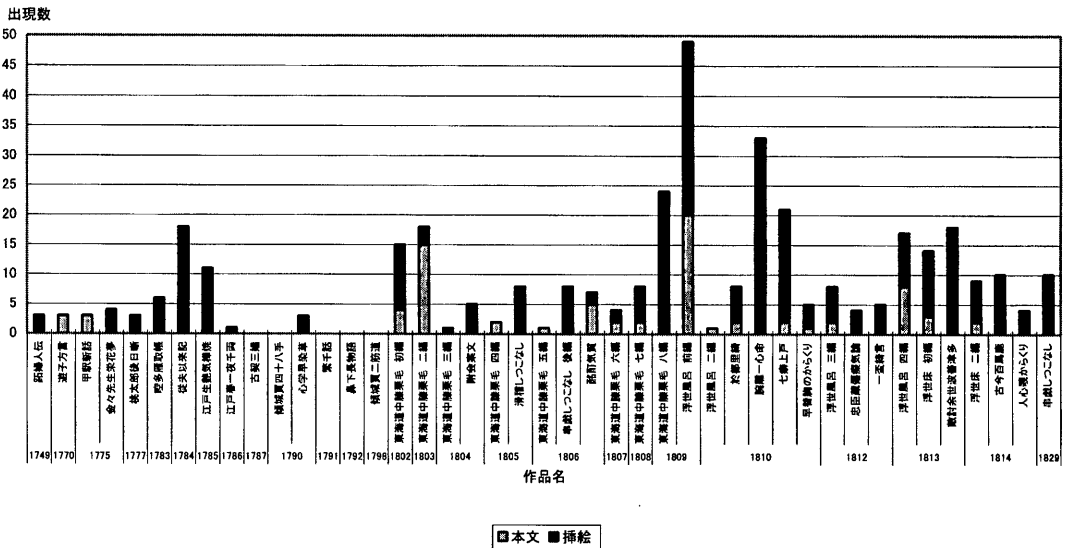


図1 作品ごとの出現数

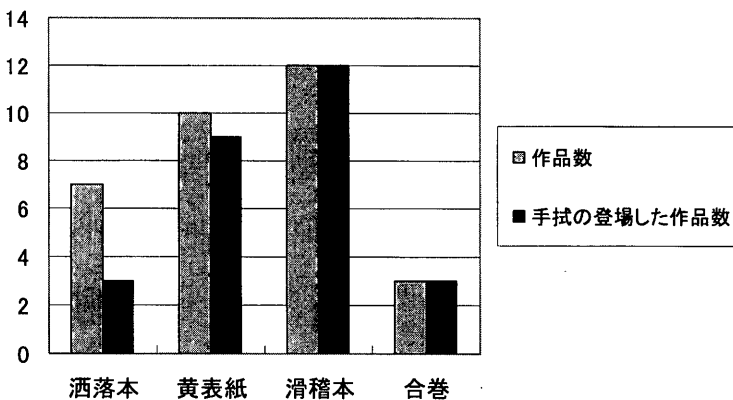


図2 調査文学作品数と手拭の登場した作品数

用が多くなる。特に被り物では労働者や喧嘩、敵討ちといった場面で多くの登場人物が鉢巻をしめている。また、町行く人々の描写にかなりの割合で手拭を被った人物が描かれている。これは手拭を被った人々が普段から多く存在し、町行く人々を描く時の共通概念として存在していたからだと言えるだろう。他にも下帯として使ったり（表3, 21-1-8）、縄の代わりに縛ったり（表3, 16-4-1）と臨機応変に使用していたようである。

3.3 地位の表現

手拭は通人であることを表すアイテムとしても使われていたことがわかる。『甲駅新話』に半可通の男が自分を通人のように見せるための見栄として、手拭で顔を隠す場面がある（表3, 3-1）。男は「これは馴染みの女郎があちこちにいるので、見つかるのと色々面倒だからだ」と遊郭に不慣れた連れの人に語っている。実際は半可通（自分では通だと思っているが、通ぶっているだけで、実際は野暮だと周りに思われている人）の男であり、滑稽な場面として描かれている。他の作品の挿絵でも遊郭の人々の中には被り物によって顔を隠す人々が描かれている。

また、『東海道中膝栗毛』で北八が何の気なしについて嘘から浄瑠璃を演じることになり、盛り上がったところで弥次郎がいてもたってもいられず浄瑠璃に参加する。その場面で弥次郎は手拭を大尺風に頭に載せる（表3, 16-7-2）。大尺とは「遊里で、多く金をつかう客。豪遊する人」（広辞苑）であり、その大尺の客の風を表すために芝居などでも使われた置手拭の一種である。ここから、大尺を表すためのアイテムとして手拭が使われていたことがわかる。このことから、手拭がただ個人の趣味だけで被り方を変えていたのではなく、被り方によってはそれ相応の立場があったことがうかがえる。

3.4 手拭の実用性と見栄

『浮世風呂』には朝湯の光景にところどころ口紅の付いた手拭を肩に懸けて現れる男がいる（表3, 21-1-3）。これは遊女との情交を見栄にしている表現である。また浮世床に『夕べな、手拭を一筋余所の女が所からへいつけて来やアがつてナ』と暴露話をされている男がいる（表3, 29-1-2）。ここでも手拭が男女の関わりを表すものとして使われている。それは、手拭がごく私的な持ち物であることと深く関係していると考えられる。

『東海道中膝栗毛』で北八が本陣（公卿大名や幕府の官人のための宿）でどさくさにまぎれて飯を食べ、椀の飯を手拭に包んで弥次郎のもとに持って帰るシーンがある（表3, 16-2-8～16-2-10）。そこで、弥次郎はその飯を食べたあと、それを包んでいた手拭を見て汚いと悪態をつく。その手拭は北八が体を洗ったものだからである。常に懐に持っていて、体を洗ったり汗を拭いたりする手拭は人に見せて歩くべきものではないのである。

これは手拭合や歌舞伎役者の家紋を染め抜いた手拭などとはベクトルを異にする性質のものである。被り物や挟み手拭のように装飾品として使われる手拭がある一方で、生活に密着した実用的な手拭もあるのである。だから、華やかな手拭と対照的に「油で煮染めたやうなる手拭」（表3, 21-1-2）があったりするるのである。

3.5 手拭と褌

手拭が笑いの要素として使われている例に褌と間違えるというのが32作品中2件あった。一つが『浮世風呂』の初編であり、西国者が他の人が桶に入れて冷やしていたもっかう褌を手拭と勘違いし、顔や体を洗ってしまうというものである（表3, 21-1-11～21-1-17）。もう一つは『東海道中膝栗毛』の二編である。こちらは北八が「白い手拭をかぶると顔が白くなっていい男に見えるらしい」というのを思い出し、早速試してみたところ、被ったのは手拭ではなく、木綿さなだのひものついた越中褌だった、という話である（表3, 16-2-1～16-2-7）。どちらも白い木綿であることから指摘されるまで気がつかないのも同じである。状況は違えど手拭と褌というアイテムの一致から、当時の江戸の人々にはオーソドックスな笑いだったのではないかと予想される。

3.6 手拭に見る江戸っ子から見た他の土地の人々

『東海道中膝栗毛』では江戸っ子と京の人の性格の違いを鉢巻の締め方で滑稽に描いている。弥次郎と北八が往来を歩いていると京の人同士の喧嘩に行き当たる。喧嘩をしているとび職風の男が手拭を鉢巻にするが、その様子は「手ぬぐひを、ていねいにおりて、はちまきをする」（表3, 16-6-1）と書かれている。喧嘩であるにも関わらず、わざわざ丁寧に折りたたんで鉢巻を締める様子が滑稽であり、喧嘩っ早い江戸っ子のねじり鉢巻と対照的であると中村幸彦校注（2000）『東海道中膝栗毛』の本文解説にも記載されている。

また、前項のように西国者が銭湯に不慣れで手拭と褌を間違える姿を滑稽に描いているようすからも江戸っ子が自分達の文化に誇りを持っており、他の土地の人々の姿はどこか滑稽であるという意識を持っていたことがうかがえる。

3.7 手拭の持ち運び方法

手拭の持ち運び方法には主に2種類が多く登場した。一つは懐にしまっておく方法、もう一つが肩に掛けて持ち運ぶ方法である。『浮世風呂』の朝風呂の光景には肩から手拭を提げて現れる人々の姿が描かれている（表3, 21-1-2～1-6）。他にも『滑稽しつこなし』に刀の柄に手拭が結び付けられているのが見える（図版5, 6）。また、腰帯の間に挟んでいる様子が描かれているものもある（図版7）が、どちらも肩に掛けている人に比べれば少数である。但し、後者は着物に柄がある場合、非常に見

分けづらいものであるため、実際数より少なく見えてしまっている可能性も否めない。

本文中に見られる身の回り品としての手拭（汗拭など）は懐にしよばせ、銭湯の行き帰りや旅の道中などでは肩にかけの姿が多い。これは現代のハンカチとタオルの関係と似ている。ハンカチなどは鞆やポケットにしまっていることが多いが、対して銭湯に行く際やハイキングなどでは手で持ったり、首に掛けたりすることが多い。旅の道中の手拭は汗を拭ったり砂ぼこりや日光を防ぐために被ったりと、懐にしまった手拭と似たような使い方をする。しかし、江戸時代の旅といえば馬か籠か徒歩であり、ほとんどが徒歩で何時間も歩き続けることを考えれば、汗をかいてもすぐに使用できるように肩から提げられるのも便利な持ち運び方法だったのである。

3.8 手拭の表記と読み

手拭の表記には「手拭」や「手ぬぐひ」などが多く見られた。これは長編である『東海道中膝栗毛』と『浮世風呂』に手拭が多く登場したため、同じ表記が多くなる結果となった。しかし、それら以前に書かれた『遊子方言』（1770）には「手のごひ」と表記されていた。古くは「たのごひ」と呼ばれていた（松本 1973, 28）手拭が「手のごひ」と呼ばれ、『東海道中膝栗毛』が書かれた1800年代には「てぬぐひ」と呼ばれることが浸透していたことがわかる。読み仮名については出版編集の段階で付与、削除されたもの、底本にあるものなどが混在し、元の振り仮名を判別するのは難しい。しかし振り仮名のつくもののほとんどが「てぬぐひ」となっている。また、『浮世風呂』に2箇所「手拭」に「てんてん」（元の表記は繰り返し記号表記）とあり、どちらも幼児に話しかけている言葉から、幼児言葉で手拭を「てんてん」と呼んだものと思われる（表3, 21-3-2, 21-4-6）。

3.9 「手拭」と「手巾」

手拭の表記に関しては、「手巾」と書いて「てぬぐひ」と読むものもある。同じ「てぬぐひ」であってもこちらの字が当てられているものは『手巾と雑巾と取違へて、顔拭く事がなんぼも有るぢや』（表3, 21-4-4）や『手巾を指に巻いて、口中を洗つて遣る塩梅なんぞはうめへもんだ』（表3, 21-4-8）などから特に顔に用いるものを指したのではないかと思われる。また、足を拭くための手拭に「俺がのは汗手ぬぐひで、役にたゝねへ」（表3, 3-3）と言っていることから汗手拭と体を拭くための手拭は別物が使われていたようである。そうは言いつつも、懐に入れていた手拭を被ったり（表3, 16-2-1~16-2-7）（実際にはこのとき被ったのは越中ふんどしだったが）、汗手拭で顔を隠したり（表3, 3-1）と臨機応変な利用もしていたようである。

3.10 手拭と生酔

挿絵を見ると生酔^{なまどい}、すなわち酔っ払いの多くが上半身をはだけ、頭に手拭を被る、もしくは首にかけるというスタイルをとっている。現代でも酔っ払いを視覚的に表現する際、顔を赤くし、ワイシャツのボタンをだらしく開け、頭にネクタイを巻いている姿を使用するが、文学作品の挿絵の描写に共通の酔っ払い像がこれだけ多く登場することを考えると、これが江戸時代の酔っ払いのオーソドックスな表現と言えよう。また、今回調査した文学作品の多くに飲酒場面や酔っ払いが登場し、江戸町人の日常的な楽しみの一つが飲酒であったことが想像できる。そして、そこにも手拭を被った人物や首から掛けた人物など、手拭を身につけた人々がよく描かれている。屋外だけでなく、飲酒の際でも手拭はそのまま身につけていたようである。

3.11 手拭の使用者

手拭に関する本文中の記述においても、挿絵においても、圧倒的に手拭と共に描写されているのは男性が多かった。本文中の記述では、『浮世風呂』の三編は女湯が舞台となっているので、使用者は女性であるが、他に手拭には『酩酊気質』の異見上戸の語る「女中や嫁がいざという時に被るものが手拭であるのは嘆かわしい」（表3, 20-1~20-5）という内容を語っている他は、目立って女性と手拭について語られていなかった。しかし、『浮世床』の「女のところから手拭をひっつけてきた」（表3, 29-1-2）という話や、『浮世風呂』の口紅をつけた手拭を持ってくる男の話（表3, 21-1-3）など、女性が手拭を使っていなかったという訳ではない。また、『酩酊気質』の異見上戸の語る女中の晴れの服装の一部であったことや、「姉さん被り」という被り方の名前のように、女性も手拭を被り物にしていたことは確かだ。

では、どうして文学作品に女性と手拭を組み合わせた描写が少ないのだろうか。考えられることの一つに、描かれている舞台がある。描かれているのは町中の雑踏や遊郭が多い。そこで多く登場するのは天秤棒をかついで物を売り歩く棒手振や、駕籠昇きなど往来で働く人々である。これらの人々は被り物をしていても多く、必然的に、これらの力仕事を担う男性と手拭の組み合わせが多くなるのである。しかし、挿絵には働く女性が手拭を被っている様子（図版8, 9）や、子を負う女性が手拭を被っている様子（図版10）も見られることからして、女性の手拭の使用が極端に少なかったということではないだろう。描かれた人物の多くが男性であること、文学作品の登場人物のほとんどが男性であるために、女性の手拭使用の描写が少ないという結果になったと思われる。そして、江戸の町はいかに男性が多く往来にいた町だったかが想像できるのである。



図版5 「滑稽しつこなし」部分



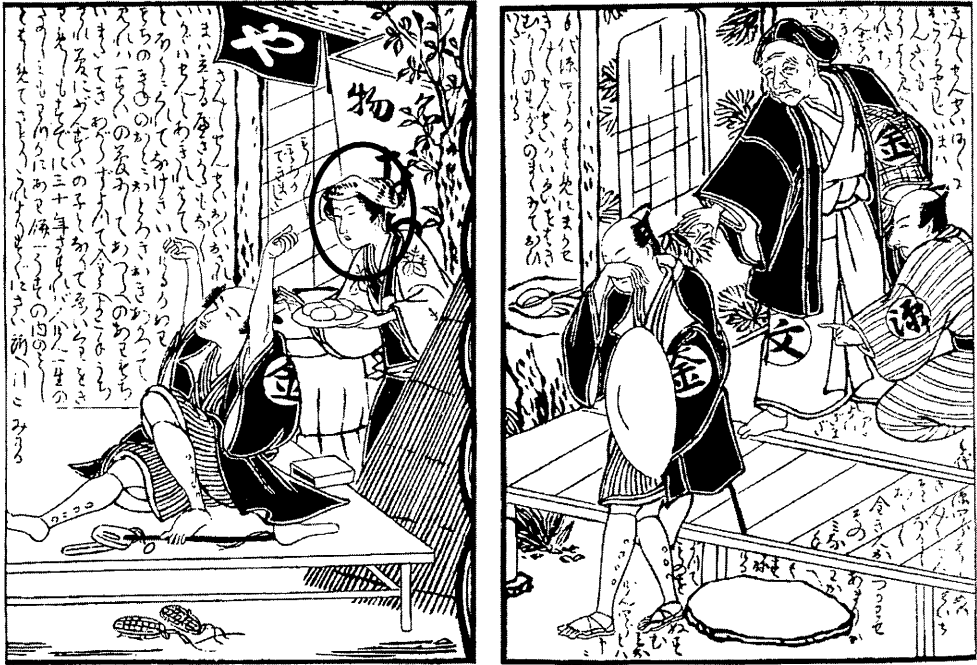
図版6 「滑稽しつこなし」部分



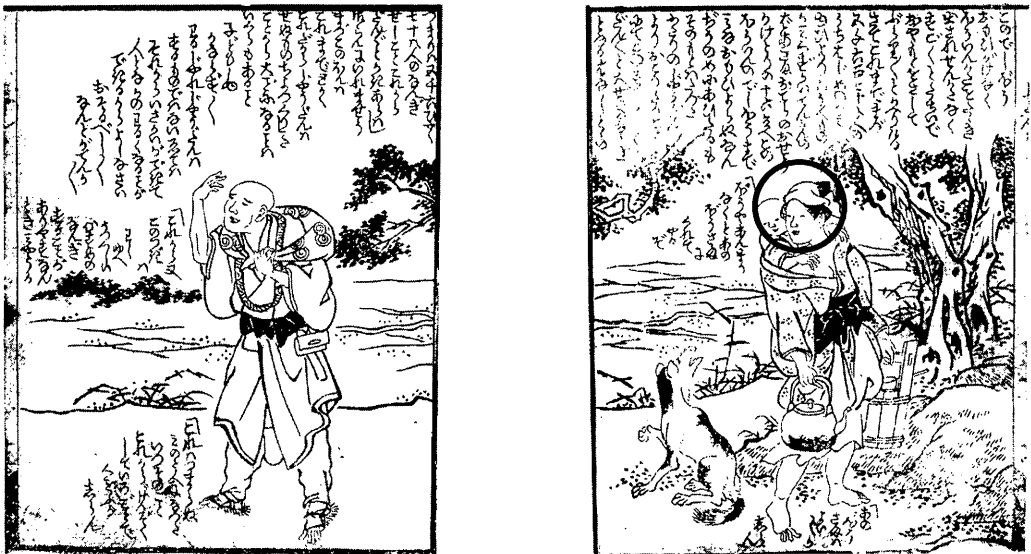
図版7 「申戯しつこなし 後編」部分



図版8 「金々先生栄花夢」部分



図版9 「金々先生栄花夢」部分



図版10 「申戯しつこなし 後編」部分

4. おわりに

江戸の人々は、初め上方の文化からの派生だった自分達の文化が、次第に独自の文化を形成し、上方の人々にも誇れるようになった。手拭についての文化もその一つである。手拭に派手な模様が付けられるようになったのは「手拭合」がきっかけだと言われており、風呂での西国者の失敗から見るに、銭湯の文化も江戸発祥のものである。鉢巻の締め方一つとっても江戸風というものが存在し、喧嘩っ早いと言われていた江戸っ子の喧嘩シーンには必ずと言っていいほど鉢巻や手拭を被った人物が描かれていた。

往來の人、酒を飲む席での姿など、人々が普段の格好を晒している場面に手拭が多く登場するということは、江戸の人々がそれだけ普段から手拭を身につけていたということである。今回調査した資料のほとんどに何かしらの形で手拭が存在していたということもその結論を裏付けるものだろう。装飾性と実用性を持ち合わせた手拭は、江戸の人々にとって日用品の一つであり、見栄を示すアイテムでもあったのである。

参考文献

- 岩田アキラ (1989) 『しるしばんてん 印半纏+手拭・紋様図案抄』 駸々堂出版
- 岩田純子 (1993) 「手拭についての研究」『信愛紀要』 vol.33, 和歌山信愛女子短期大学, pp.19-26
- 岩田純子 (1997) 「かぶりもの歴史考—前稿手拭からの発展—」『信愛紀要』 vol.37, 和歌山信愛女子短期大学, pp.7-14
- 榎並英子 (1981) 「庶民の衣生活に関する一考察—手拭・前掛・襷について—」『ノートルダム清心女子大学紀要 生活経営学・児童学・食品・栄養学編』 第5巻第1号, ノートルダム清心女子大学, pp.21-25
- 大田区立郷土博物館 (1994) 『姉妹館提携10周年記念 ピーボディー・エセックス博物館収蔵 手拭展 図録』 大田区立郷土博物館
- 恩田恭子 (1968) 「手拭に関する一考察」『研究紀要』 第1号, 文化女子大学, pp.187-188
- 川上桂司 (1974) 「江戸の手ぬぐいあれこれ」『衣生活』 第195号, pp.38-41
- 河出書房新社 監修 (2006) 『かまわぬの手ぬぐい使い方手帖』 河出書房新社
- 君野倫子 (2005) 『ハイカラ手ぬぐい案内』 河出書房新社
- 小池三枝 (1991) 『服飾の表情』 勁草書房
- 式亭三馬 (1930) 『浮世風呂, 浮世床』 友朋堂書店
- 下家由起子 (2005) 「てぬぐいと日本女性」『山野研究紀要』 第13号, 山野美容芸術短期大学, pp.33-40
- 高田衛・原道生 責任編集 (1997) 『十返舎一九集』 国書刊行会
- 高橋春子 (1993) 「半纏と手拭」『衣の民俗館・日本民俗史学会中部支部研究紀要』 第10号, 衣の民族館, pp.93-102
- 高橋雅夫 (2002) 『守貞謾稿図版集成』 雄山閣
- 棚橋正博・鈴木勝忠・宇田敏彦 注解 (2000) 『黄表紙 川柳 狂歌』 小学館
- 谷峯蔵・花咲一男解説 (1986) 『洒落のデザイン 山東京傳画「手拭合」』 岩崎美術社
- 手ぬぐい研究会 (2006) 『大和撫子のための手ぬぐい学校』 辰巳出版
- 中野三敏・神保五彌・前田愛 校注・訳 (2000) 『洒落本 滑稽本 人情本』 小学館
- 中村幸彦 校注 (2000) 『東海道中膝栗毛』 小学館
- 花咲一男 (1987) 「江戸時代の汗拭」『化粧文化』 第16号, pp.103-108
- 細目しげ子 (1980) 「かぶりものとしての手拭の起源と変遷(Ⅱ)—江戸時代における手拭かぶりの着装形態の考察—」『三島学園女子大・短大紀要』 第16号, 三島学園女子大学・女子短期大学, pp.11-26
- 松本敏 (1973) 「手拭」『風俗』 第11巻 第12号 日本風俗史学会, pp.28-36
- 水野稔 (1991) 『山東京伝年譜稿』 べりかん社
- 三田村鳶魚 (1959) 『江戸生活事典』 青蛙書房
- 都新聞社編 (1900) 「手拭のはなし」『都の華』 40号, pp.1-4
- 柳田國男 (1943) 「手拭沿革」『柳田國男全集 31 昭和18年~昭和24年』 筑摩書房, pp.11-26
- 柳田國男 (1969) 「手巾序説」『定本柳田國男集 第14巻』 筑摩書房, pp.400-403